

全国草原再生 ネットワーク

草原がつなく、人・自然・文化

ニュースレターvol.5 (Jan, 2011)

〈発行〉全国草原再生ネットワーク
<http://www.sogen-net.jp/>



雪に覆われた三瓶山西の原（島根県）。雪が解けると、火入れの季節が来る

■新年のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。ここ近年にない年末からの寒波で、晩秋から黄色みを増していたススキ草地も、積雪による白銀色のコントラストが加わり、夏とは違った風情を醸し出しています。

昨年度は、10月に名古屋市において生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開催され、日本政府は、里山・里海が生態系サービスを提供する貴重な場所であることを強調しました。また、12月には里地里山の保全活動を促す「生物多様性保全のための活動促進法」いわゆる「里地里山法」が国会で可決、成立しました。

草原も、森林や農地、ため池などと同様に、里地里山の生態系構成要素の一つとして、生物多様性に支えられる多様なサービスの供給機能が期待されています。最近では、安定型の植物炭化物（微粒炭）の供給による土壌への炭素蓄積、広葉樹に劣らぬ高い水源涵養力、ススキなど珪酸型イネ科植物の利用に

よる水系への珪酸物質供給など、新たな草原の価値もクローズアップされてきました。草原のもつ生態系サービスへの関心は、年々高まってきています。

今年の干支はウサギです。童謡の歌詞にある「ウサギ追いしかの山」は、鬱蒼とした森林ではなかったでしょうし、「桃太郎」の冒頭の一節「おじいさんは山に柴刈りに」は野草を刈りに出かけたのだと解釈する説もあります。日本人の原風景である里山そして草原の情緒を蘇らせるため、当ネットワークとしても活動をさらに加速し、ウサギが跳び跳ねるような飛躍の年にしたいと願っております。

本年も、旧年に変わりませず、多大なご支援をいただきますよう、どうぞよろしく願いいたします。今年一年が、会員のみなさんにとって最良の年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

（高橋佳孝：全国草原再生ネットワーク会長）

■記念シンポジウムが開催されました

2010年は、草原再生ネットワークに加盟している複数の団体が15周年など節目を迎えました。それを記念して10月には、フォーラムやシンポジウムが開催されました。ネットワークでは、会長や事務

局が情報提供に出かけるなど、協力をさせていただきました。

これらの団体の今後のご活躍、更なる飛躍を願っております。

◇阿蘇グリーンストック 財団設立15周年記念シンポジウムを開催！

阿蘇グリーンストックでは、去る10月8日、熊本市で「阿蘇草原の多面的価値について」をテーマ

に、本ネットワーク会長の高橋佳孝先生と北海道大学 北方生物圏フィールド科学センターの山田敏彦

先生の基調講演、4名のパネラーによるパネルディスカッションと言う形での財団設立15周年記念シンポジウムを開催しました。

「多様な人と生き物が集う阿蘇草原の豊かな世界」と題した高橋先生の基調講演では、草原の歴史や恵み、全国的に見る草原の現状などについて、分かりやすく話し頂き参加者の皆さんからも大変好評でした。

「エネルギー資源作物としてのススキの評価と実用化への課題」と題した山田先生の講演では、エネルギー源としてのススキ草地についてのお話、ススキの品種改良や将来に亘ってのバイオマス循環に基づいた持続的社会的構築についてお話を頂きました。

パネルディスカッションでは、町古閑牧野組合長の市原さん、阿蘇地域振興デザインセンター事務局長の坂元英俊さん、阿蘇の草原と森林でCO₂の土壤固定化について調査された北海道大学の当真要さん、広島の高原の自然館学芸員の白川勝信さんの4名をパネラーにお迎えし、阿蘇草原の多面的な価値について、生物多様性、水源涵養機能、CO₂の土壤固定化、茅の利用や観光面での役割などを、様々な観点



から分かり易くお話しして頂きました。

一昨年開催したシンポジウムでは、地球研の窪田順平先生から「草原が森林にも劣らない水源涵養機能を有している」ことをお話頂き、今回また当真様から「草原が杉林に比べ約1.8倍のCO₂土壤固定化に役立っている」ことが明らかにされ、文字通り「草原の多面的価値」について学ぶことになったシンポジウムでした。

当日は、野焼き支援ボランティアをはじめ、一般市民の方、地元の牧野関係者、行政関係者など170名ほどの参加がありましたが、当日のアンケートでも9割を超える方から『大変有意義であった』と本当にたくさんの意見をいただき、阿蘇草原の価値について更に理解を広めることができたと考えています。

現在、このシンポジウムの報告書を製作中です。出来上がりましたら、本ネットワーク会員の方々でご希望の方には実費でお届け出来るようにしたいと考えています。

(後藤彩華・山内康二：阿蘇グリーンストック)



◇森林塾青水設立10周年記念シンポジウムが開催されました！

森林塾青水の10周年記念として、10月23日～24日に、草原再生フォーラム「上ノ原は人と生き物の入会地－暮らしの現場から生物多様性の保全を考える－」が行われました。

23日は、フォーラムに先立ち、上ノ原などのエクスカーションが行われました。ススキ草原の中を歩きながら、青水の方から、季節の草花、草原の管理方法、遠くに見える谷川岳などの話を伺いました。また茅葺き屋根の修復中の神社も見学させて頂くことができました。茅葺きの作業を見る機会は初めてでしたので大変新鮮でした。





午後には場所を移して、フォーラムが開かれました。会員でもある海老沢秀夫氏より、「上ノ原は人と生き物の入会地ー持続的に保全する仕組みを考える」と題した提言報告があり、会の活動について多くの画像を交えて紹介がありました。その後、日本自然保護協会の朱宮丈晴氏より、「生物多様性の10年ー地域の保全活動がみんなの暮らしを支えるー」と題して基調講演がありました。草原に限らず、生物多様性の保全が何故大切なのか、その保全のためにどのような活動が行われているのか、話がありました。また、本ネットワークの高橋佳孝会長からは、「全国の草原と保全活動の状況ー森林塾青水の取り組みの特色と期待」と題した情報提供がありました。草原が見直されている理由やその価値、そして森林塾青水の特色について、全国の草原を見つめ続けてきた視点から話がありました。

24日には、上ノ原を会場に、茅刈り講習会と茅刈り検定会が開催されました。まずは、茅刈りの練習



と、その準備の鎌ときです。携帯用の砥石を使って鎌をとく練習をしました。その鎌を使ってススキを刈り、束を作っていく、5つの束が出来たところで、それらをさらに束ねます。これを「ぼっち」と呼ぶそうです。これら一連の作業を教えて頂いたあとは、制限時間内にどれだけの茅を刈れるか、検定のはじまりです。簡単に刈れるだろうと思っていたのは最初だけ、2つめの束、3つめの束と進むにつれて、握力が低下していくのがはっきりとわかりました。普段の運動不足が・・・束は4つしか刈れず、ぼっちを作ることは出来ませんでした。作業中は、検定員の方が、刈り方や束ね方などをチェックし、採点します。結局わたしは初級どまり。それでも初めてのぼっち作りは大変楽しい時間でした。

大変盛りだくさんの2日間を過ごさせて頂きました。関係者のみなさま、お疲れ様でした。

(ネットワーク事務局)

■各地からの報告

◇乙女高原の草刈りボランティア

山梨県山梨市の乙女高原は秩父山塊の懐にあり、標高は1,700メートル。戦前は刈った草を肥料や家畜の飼料に利用する採草地として、戦後はスキー場として活用するため、連綿と草刈りが続けられ、草原が維持されてきました。ところが、2000年、スキー場は廃止。このままでは乙女高原の草原がなくなる。次の世代にこの景観を見せられない。そう考えた私たちは山梨県・山梨市と協働して草刈りを継続させようと決意し、ボランティアを募集する草刈りイベントを開始。翌年には乙女高原の自然を次世代に確実に譲り渡す目的で“乙女高原ファンクラブ※”を立ち上げ、今に至っています。



今回は 11 年目のボランティアによる草刈りです。参加者 207 名。賜林（県有林）保護組合の皆さんを中心とした機械刈り班は慣れた手つきでエンジン付き草刈り機を操り、草をなぎ倒していきます。手に手に鎌を持った手刈り班は、機械で刈りにくいところを丁寧に刈っていきます。刈った草は大きなビニールシートに載せ、おみこし気分で運び、土壌流失を防ぐ目的で草原内の遊歩道に敷き入れます。また、去年からは、車を使って、過去に崖崩れを起こしたところに運び入れています。草索性植物のタネを供給し、自然が再生するのを手伝おうという試みです。



乙女高原ファンたちの熱意と行政との協働によって支えられてきた乙女高原の草刈り。毎年 11 月 23 日・勤労感謝の日に勤労しています。ご参加下さい。

(植原 彰：乙女高原ファンクラブ代表世話人)
 ※<http://fruits.jp/~otomefc/>

◇ササ刈り体験ツアーを開催いたしました！

東お多福山草原保全・再生研究会は、2010 年 12 月 5 日（日）に、国立公園六甲山地区整備促進協議会と共催で、六甲山系東お多福山のネザサ刈りを一般の皆様にご体験していただくツアーを開催いたしました。このツアーは東お多福山草原のススキ草原の再生に賛同して下さる方々の輪を少しでも広げたいという意図で企画したものです。

企画当初は、実施日が 12 月初旬ということもあり、寒風吹きすさぶ中での活動は参加者もつらだろうと心配していたのですが、当日は好天に恵まれ暖かい日射しと穏やかな風がそよぐ中で、54 名の参加者と 16 名のスタッフが気持ちよい汗を流しました。一般参加者に加え、地元企業の小泉製麻株式会社の



社員及びその家族の皆様もご参加くださり、幼稚園児から 70 代後半のベテランまで様々な世代がササ刈りを行いました。



今回のツアーでは、ササがいかに鬱蒼と茂り、草索性植物の生育環境を奪っているのかを参加者が実感できるよう、あえて困難な剪定鉋と刈り込み鉋のみで丁寧にササを刈る方法を採用しました。1 時間という短時間でのササ刈りでは、管理できる面積はわずかではありましたが、刈った後の地面にササの落ち葉が大量に積もっていることに驚かれたり、ササの硬さを実感されたりと参加者の反応も上々。ツアー後の反省会では、草原の現状を少しでも理解していただけたのではないかといい好評価があった一

方で、草原生植物が観察できない時期の開催では草原の魅力が伝わらないのではという反省の声も上がりました。今回の経験を踏まえ来年度はササ刈り体験にこだわらず、秋に草原の魅力を伝える植物観察会を開く予定です。

研究会の活動も来年度で4年目を迎えます。2011年度からは刈り取り面積もこれまでの600㎡から7000㎡に拡大して精力的に活動してゆきたいと考えています。皆様からのご声援をお待ちしております。

(橋本佳延：兵庫県在住)



◇2010年代のための里山シンポジウム - どこまで理解できたか、どう向き合っていくか - に参加しました

2010年10月30日～31日に大阪市立自然史博物館で開催された「2010年代のための里山シンポジウム」に参加しました。初日は「里山とは何か？」と題して、植生学、土地利用の歴史性、文献調査や考古学など様々な観点から里山とは何か？について討論しました。二日目は「どう向き合っていくか？」と題して、ナラ類の生態、ナラ枯れ、市民参加や資源利用など、里山をどう使っていくか？について討論しました。興味深い話がたくさん出てきましたが、草原の利用について考えたことを簡単に報告します。二日目の「どう向き合っていくか？」では、雑木林の利用については様々な話題が出ましたが、草原の利用についてはほとんど議論にならず残念でした。草の利用は、肥料や飼料などを中心に昔はかなりの量があったと思われます。資源としての草を供給していた草原をどうしていくか、もっと様々な視点からの議論が必要だと思いました。

薪ストーブを地域に導入した社会実験の結果の報告がありました。草の利用に関しては、各地で野草堆肥を作っているところがありますが、野草堆肥を



使った農家の方の実感や実際の収量・品質などをモニタリングする社会実験の導入がおもしろいのではないかと思います。里山の利用は人が関わる課題ですので、現代社会に里山の資源をどうやって導入していくかを考える必要があります。その基礎として、こういった社会実験は有効なのではないかと考えました。

シンポジウムでは講演のほかにポスター発表も行われ、土地利用の変遷の解析など、草原に関連する発表もいくつかありました。発表の一部を紹介しま



すと、中国地方の草原は明治時代に比べて激減しており、現在残っている草原には高密度で絶滅危惧植物が生育しているそうです。草原の保全・再生は効率的な絶滅危惧植物の保全にも繋がるようです。

「里山とは何か？」という部分に関しては、里山に焦点があたり始めて約 20 年で随分いろいろなことが分かったのではないかと思います。しかしなが

ら、その利用については過去の利用をそのまま現在にあてはめるのは難しい側面が多いと考えています。より現代的な利用、「どう向き合っていくか？」についてはまだまだ未発達で、これから活発に議論すべき課題だと思いました。

(横川昌史：京都府在住)
(写真提供：森林総合研究所)

◇ウスイロヒョウモンモドキの保全活動

大山隠岐国立公園内三瓶山地域にはウスイロヒョウモンモドキという草原性の蝶が生息しています。

1980 年代の前半までは三瓶山のあちこちで見ることができましたが、草原が徐々に森林化したこと



などによって、1994 年頃から個体数が激減しはじめ、絶滅の危機に瀕しました。

この蝶の絶滅を阻止しようと、島根大学や県立三瓶自然館等の研究機関、NPO 法人緑と水の連絡会議や大田の自然を守る会等の地元団体、環境省、島根県の行政機関等が集まり、成虫発生時期（6 月下旬から 7 月中旬）のモニタリング調査、草刈りや食草の植栽などの生息地管理、人工飼育した幼虫の放虫等の保全活動を実施しています。さらに 2008 年からは地元小学校の児童たちがこの活動の輪に加わって、一緒に活動をしています。

これまで保全活動を進めてきましたが、気候等の影響もありここ数年の成虫発生数は 100 個体を下回わ

っていました。さらに今年の調査では成虫が確認できず、絶滅した可能性も否定できないという非常に危機的な状況となりました。この結果を受け、参加団体等が今後の活動について話し合いましたが、まだウスイロヒョウモンモドキが三瓶山に生息していると信じ、再びこの蝶が三瓶山に舞うことを目指して今後も継続して活動を行っていくことになりました。

ウスイロヒョウモンモドキのように三瓶山には、絶滅の危機に瀕する草原性の野生動植物種が多く生息・生育しています。一度絶滅した種を復元することは不可能ですので、多様な生物を育む草原の機能が十分に果たせるように、このネットワークを活かして三瓶山の草原環境を維持・復元していきたいと思っています。



(錦織慎司：島根県在住)

◇阿蘇草原再生募金の取り組みが始まりました！

阿蘇草原再生協議会では、阿蘇の草原を次世代の子どもたちに引き継いでいくため、持続的な草原利用・維持管理に向けた新たな仕組みの 1 つとして、「阿蘇草原再生募金」を 2010 年 11 月 15 日に創設しました。この募金は、5 年～10 年後には今の阿蘇

の草原維持が極めて困難になる状況を憂い、熊本県内はもとより九州全体の人々に呼びかけ、少しでも地元の草原維持及び野焼き支援ボランティア活動などに役立てていこうと言う趣旨で、2 年程前から準備されてきたものです。



11月22日 熊本市下通りにて

これに先立ち 10 月には、阿蘇草原の多面的機能を受益者である県民、国民が支えるという意志のもとに、行政、経済界、学会、報道機関で構成する「阿蘇草原再生千年委員会」も発足しました。この委員会は、阿蘇草原再生協議会を支援し、今後 3 年間かけて、阿蘇草原の危機と再生への取組みを広く知ってもらうためのキャンペーンやイベントを展開するとともに、企業など各方面に今回の「阿蘇草原再生基金」の呼びかけを行い、これらの活動を通じて「世界文化遺産登録」の支援に取り組むことにしています。

募金の開始に合わせて、11 月 21 日（日）と 23 日（火・祝日）に熊本市の下通りおよびサンロード新市街で、阿蘇草原再生協議会の構成員や関連団体の皆さんと一緒に、街頭募金キャンペーン（募金の呼びかけとチラシ配布）を実施しました。当日は、野焼き作業の服装（ゼッケンや火消し棒、ジェットシューターなど）のボランティアの方、地元の牧野

組合や森林組合、自治体、環境省、農林水産省の職員、グリーンコープの組合員、草原再生協議会のメンバーなど、本当に多くの皆さんが集まってきて、草原の現状や大切さを街ゆく人に訴え、募金を呼びかけました。

募金額は当初の予想を大きく上回り、2 日間の合計で、28 万円以上の募金が集まりました。街ゆく若い子からお年寄りまで、たくさんの方に「頑張ってください!」と声をかけていただきました。本当にありがとうございました

これからも色々な場所で募金活動を行っていきます。今回のイベント後も、11 月 25 日、26 日には熊本市内で草原再生シール野菜の販売と募金活動を、28 日は「ロアツ熊本」の最終戦の会場でも募金活動をしました。いずれ福岡市でも募金キャンペーンをしたいと思っています。



11月21日 熊本市サンロード新市街にて

(高橋佳孝・山内康二：阿蘇草原再生協議会)

◇北広島町の生物多様性地域戦略のパンフレットが出来ました

広島県山県郡北広島町では、全国に先駆けて、市町村レベルでの生物多様性地域戦略が策定されています。この戦略の概要をまとめたパンフレットが出来上がりました。

町内では、雲月山、千町原の 2 箇所で火入れが行われています。戦略の中では、ブナ林や湿原といった原生的な自然だけでなく、これら半自然草原も、地域の重要な生態系として位置づけられています。また、地域戦略を実現していくために、町内各地でキャラバンが催され、ボトムアップが図られている点も画期的です。

入手を希望される方は、北広島町までお問い合わせ

せ下さい。

(白川勝信：広島県在住)



■草原をめぐる動き (2011年1月～4月)

- 1/22 COP10 特別セミナー&沼田眞賞授賞式・記念講演会 (場所: 清澄庭園大正記念館 (東京都江東区))
- 2/6 乙女高原フォーラム「シカ・人・乙女高原の今と未来」 (場所: 山梨県山梨市民会館、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 2/12-13 野焼き支援ボランティアの初心者研修会 (第1回) (場所: 国立阿蘇青少年交流の家他、連絡先: 財団法人阿蘇グリーンストック)
2/19-20 に第2回開催
- 2/20 秋吉台山焼き (場所: 山口県美祢市秋吉台、連絡先: 美祢市)
- 3/19 三瓶山西の原火入れ (場所: 島根県大田市、連

絡先: 大田市役所)

- 3/26-27 日本草地学会 (場所: 宇都宮大学、連絡先: 日本草地学会)
- 4月上旬 塩塚高原山焼き (場所: 愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先: 四国中央市役所・三好市役所)
- 4月上旬 千町原山焼き (場所: 広島県山県郡北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 4/9 雲月山山焼き (場所: 広島県山県郡北広島町、連絡先: 西中国山地自然史研究会)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

■事務局からのお知らせ

阿蘇の野焼き安全マニュアルについて

阿蘇では、阿蘇グリーンストックにより安全マニュアルが作成されていますが、阿蘇市でも、野焼き作業を安全に実施するため、初のマニュアルを作成することになりました。来年1月中旬に予定している「火入れ会議」で意見を聞き、マニュアルが2月までに完成される予定のようです。

これからの時期、各地で火入れや野焼きが始まります。安全に野焼きや火入れを行うため、阿蘇地区のマニュアルは参考になると思われます。

ホームページ「火入れカレンダー」への情報提供のお願い

もう数ヶ月もすれば、各地から火入れや野焼き、山焼きのたよりが届く季節になります。ネットワークでは、各地で行われる火入れの情報を共有するために、「火入れカレンダー」としてホームページ上で公開しています。メーリングリストや事務局のメールに情報をいただければ、カレンダー上で公開させていただきます。みなさまからの情報提供をお待ちしています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.5 2011年1月号

全国草原再生ネットワーク事務局

694-0064 島根県大田市大田町大田イ376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】今回も様々な方からご報告をいただき、これまでにないボリュームの号が作成できました (新春特集号のようですね)。各地からの写真をみながら、子どもたちの写真が増えていることに、喜んでいきます。「川ガキ」ならぬ「草ガキ」を全国に増やしていく、わたしたちの大きな宿題かもしれませんね。

そんなこんなで、ニュースレターも丸1年をむかえることができました。これもひとえに、原稿を書いてくださったみなさまのおかげです。これからも草原の情報が交換できる場になるよう、努力していきます。本年もよろしくお願いたします。